

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1499集

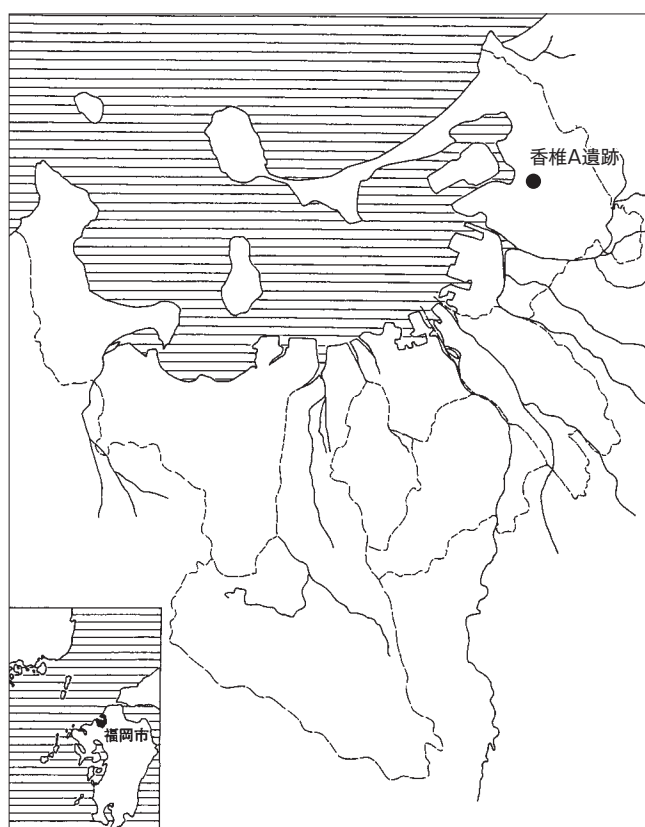
KA SHI I
香椎 A 遺跡 6

— 第9次調査報告 —

2024
福岡市教育委員会

KA SHII
香椎A遺跡 6

— 第9次調査報告 —



遺跡略号 KSA-9

調査番号 2224

2024
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書は宅地造成に伴い、東区香椎4丁目地内で実施した香椎A遺跡第9次調査の成果を収めるものです。

今回の調査では、中世の掘立柱建物・溝・土坑・柱穴などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査委託者様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例言

1. 本書は宅地造成に伴い、福岡市東区香椎4丁目地内において実施した香椎A遺跡第9次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット SP 柵 SA 掘立柱建物 SB 溝 SD 土坑 SK
3. 遺構の実測は木下博文が行った。
4. 遺物の実測は山崎賀代子が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6. 製図は木下博文が行った。
7. 本書で使用した方位は磁北で、真北より6°20′西偏する。
8. 中国産陶磁器の分類は、以下の文献によった。
太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府の文化財第49集 2000
9. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
10. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号 2224	遺跡略号 KSA-9	分布地図番号 017
所在地 東区香椎4丁目1244番1、1244番2	調査面積 177㎡	
調査期間 2022.9.5～2022.10.27		

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 調査の記録	5
1 調査の概要	5
2 遺構と遺物	5
土坑	5
溝	11
掘立柱建物	14
柵	14
ピット出土遺物	16
3 まとめ	16
図版1～5	17～21

挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)	2
図2 調査地点位置図 (S = 1 / 3000)	2
図3 調査区位置図 (S = 1 / 500)	3
図4 調査区平面図 (S = 1 / 120)	4
図5 S K01・05・07・08・09・10・13実測図 (S = 1 / 40)	7
図6 S K11・14・15・16・17・28実測図 (S = 1 / 40)	8
図7 S K01・05・07・08・11出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 2)	9
図8 S K14・15・16・17出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 2)	10
図9 S D06および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3、1 / 2、1 / 1)	12
図10 S D12・21・23および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3)	13
図11 S B24、S A25実測図 (S = 1 / 60)	14
図12 ピット出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	15

図版目次

図版1	1区全景 (南から) S K01 (北から) S K05 (東から) S K07 (西から) S K08 (東から) S K09 (西から) S K10 (東から) S K13 (東から)
図版2	S D02 (北から) S D06 (東から) S D12 (西から) 2区全景 (北から) S B24 (東から) S P35根石 (東から) S K14 (西から) S K15 (東から)
図版3	S K16・17 (西から) S D21 (南東から) S D23 (南西から) S A25 (南西から) S P55 (東から) 3区全景 (南から) S D30 (東から) S K28 (西から)
図版4	出土遺物1
図版5	出土遺物2

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、令和4（2022）年4月14日付で、大和ハウス工業株式会社福岡支社より東区香椎4丁目1244番1、1244番2地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号2022-2-51）。同地内は香椎A遺跡の範囲内であり、令和4（2022）年6月14日に確認調査を実施し、現地表面下30cmで遺構を確認した。

今回は戸建住宅建設に伴う造成が計画されており、計画のうち切り下げによって残存遺構への影響を及ぼす駐車場部分のみを対象とし、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、令和4（2022）年9月5日に着手、9月7日に機材搬入・バックホウによる表土剥ぎを行った。9月8日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、令和4（2022）年10月27日に終了した。

2 調査体制

調査委託 大和ハウス工業株式会社福岡支社

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査 令和4年度 資料整理 令和5年度）

調査総括 経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長 菅波 正人（令和4・5年度）
同課調査第1係長 本田 浩二郎（令和4・5年度）

庶務 文化財活用課管理調整係 内藤 愛（令和4・5年度）

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 田上 勇一郎（令和4・5年度）

同課事前審査係主任文化財主事 森本 幹彦（令和4年度）

同課事前審査係 板倉 有大（令和5年度）

三浦 悠葵（令和4年度）

三浦 萌（令和5年度）

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係 木下 博文

第2章 遺跡の立地と環境

香椎A遺跡は福岡市の北東部、多々良川北方の香椎丘陵上に立地する。遺跡の南東隣に神功皇后による渡韓征伐伝承との関わりの深い香椎宮が鎮座する。

最古の遺構・遺物として、4次調査地点の北に連なる6次調査で縄文時代後・晩期のものが検出されている。弥生時代には、現香椎原病院敷地内の3次調査で、終末期の小児棺墓が検出されている。古墳時代には、遺跡の北西海岸部に香住ヶ丘、多々良川河口に名島といった三角縁神獸鏡を有する前期古墳が展開する。遺跡南方700mの舞松原古墳は、調査の結果全長37m、小さな方形の造出部をもつ4世紀末の帆立貝式古墳であることが判明した。近い時期として、4次調査では自然流路内から小型丸底壺・高杯・甕など水辺の祭祀をうかがわせる土器群が出土している。

時代が下り平安時代後期になると、香椎宮神官の活動の盛んな様相がうかがえる。現在実物は所在

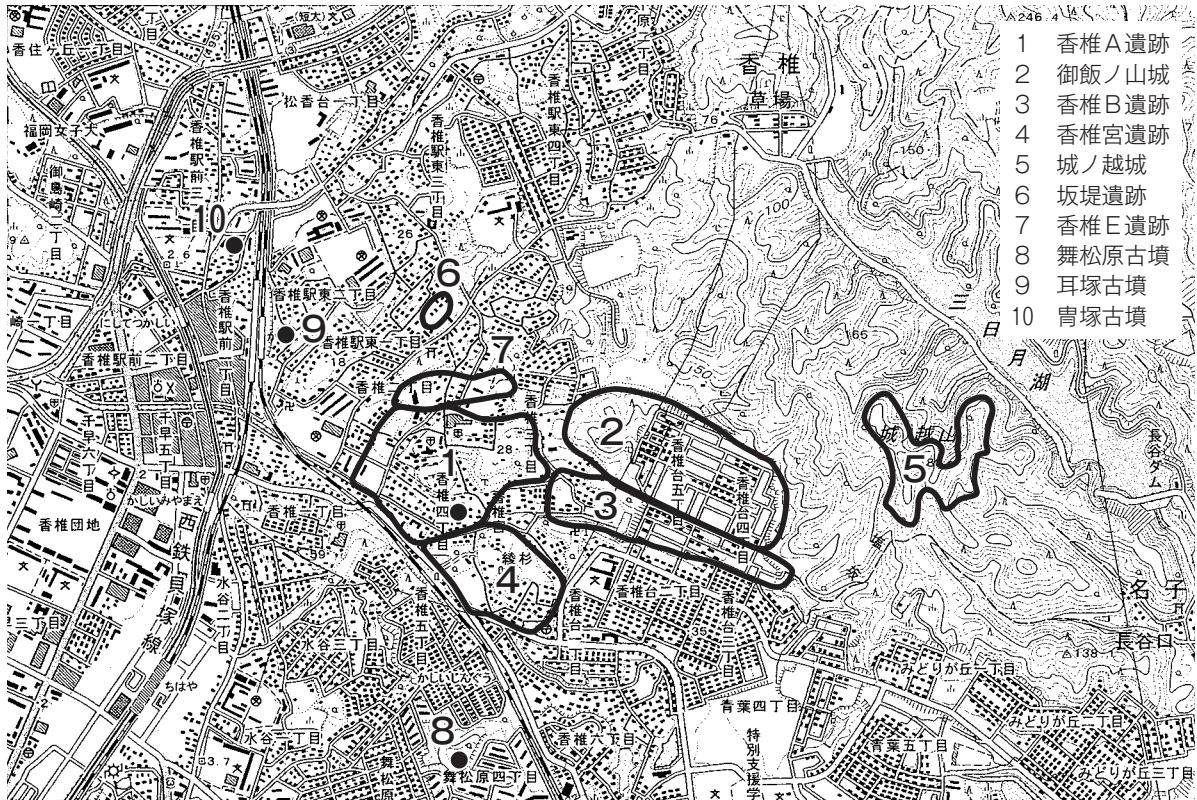


図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)

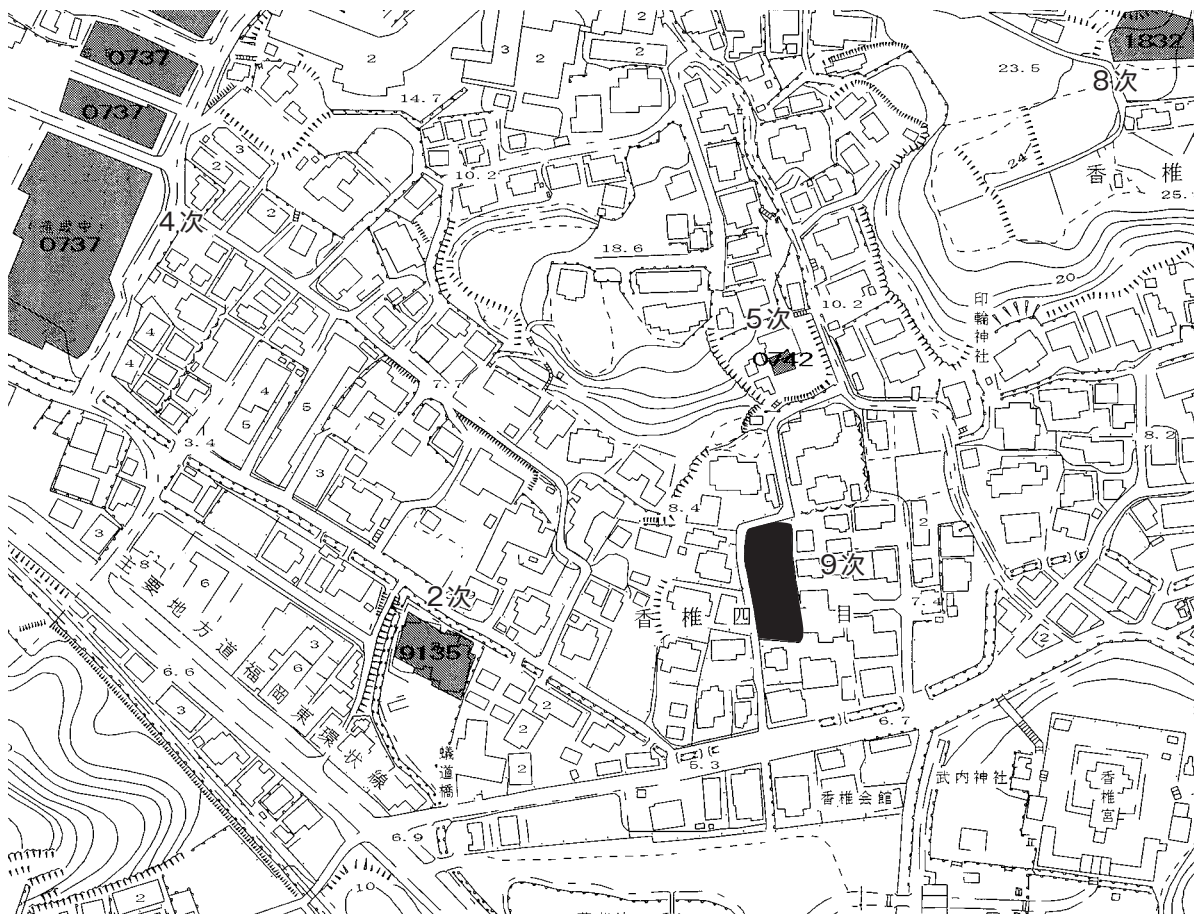


図2 調査地点位置図 (S = 1 / 3000)

不明であるが、かつて香椎宮近辺に埋納されたとみられる銅製経筒の銘文が残されている。その中に「香椎宮大惣檢校僧遍祐」の名がみえ、経塚造営事業も手掛けている。他にも裏付けとなる調査成果が遺跡内および周辺域で上がっている。遺跡東方の香椎宮裏丘陵にあたる場所で行われた香椎B遺跡8次調査では湖州鏡・磁器椀・鉄刀子を副葬し、石積み基壇を伴う11～12世紀の墓群が確認された。坂堤遺跡2次調査では、北部九州に特徴的な滑石製経筒外容器の蓋が出土している。

遺跡内の2次調査では12世紀後半～14世紀までの掘立柱建物群・井戸が検出され、中には庇・縁を持つ寝殿とみられるものがあり、井戸からは大量の土師器が出土し、宴をうかがわせる。4次調査では13世紀後半～16世紀にいたる大規模な掘立柱建物群・縦板組ないし石組井戸・墓を検出し、香椎宮宮司の屋敷地とみられている。

今回の調査地点は、2次調査地点の東北東130m、香椎宮の北西150mに位置し、これまでの調査地点の中で最も香椎宮に近接している。

- 2次 『香椎A』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第317集 1993
- 3次 『香椎A遺跡2』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第622集 2000
- 4次 『香椎A遺跡3』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1072集 2010
- 『舞松原古墳』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第533集 1997
- 『坂堤2』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1114集 2011
- 『香椎B遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第621集 2000
- 『香椎B遺跡2』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1186集 2013

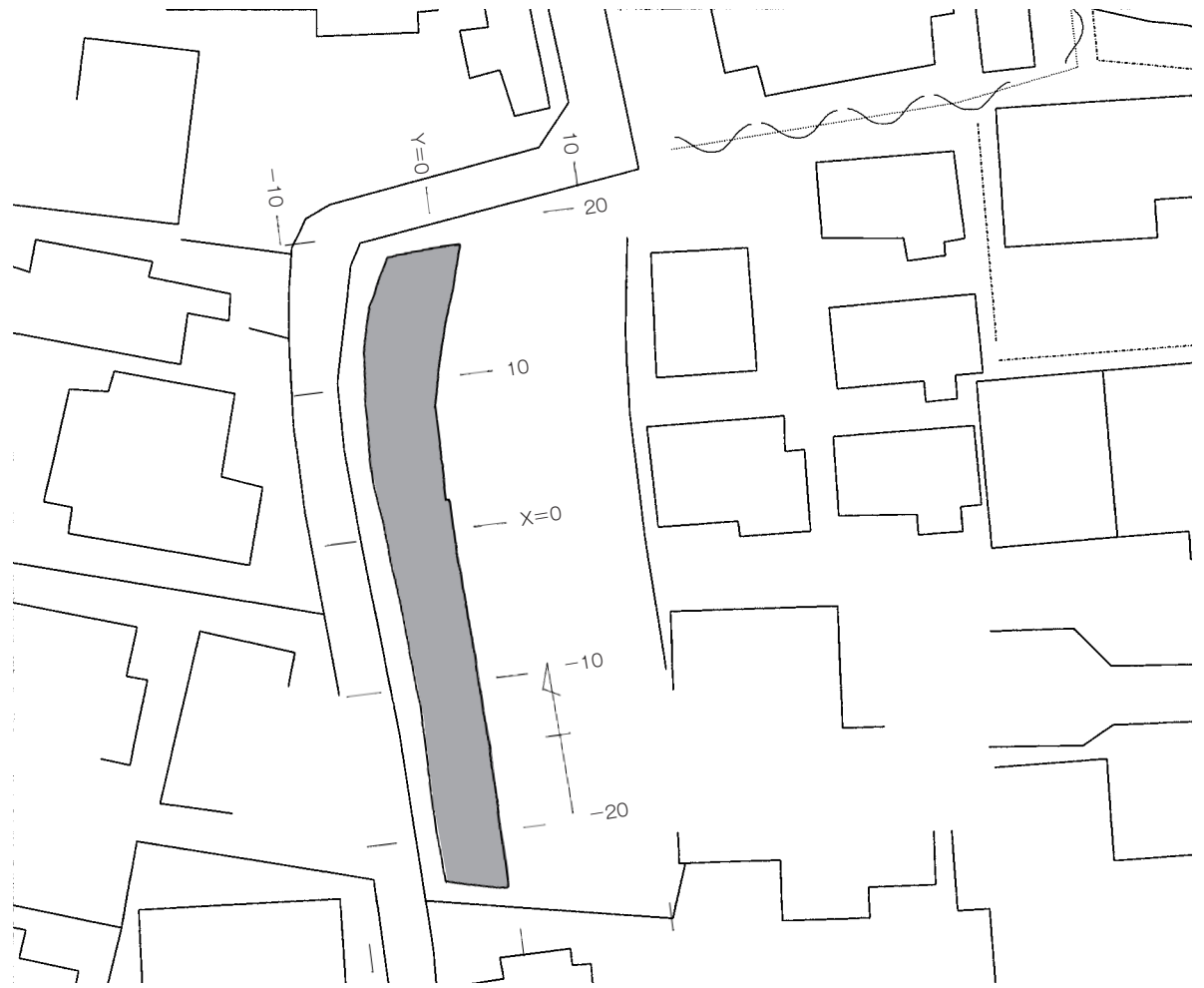


図3 調査区位置図 (S = 1 / 500)

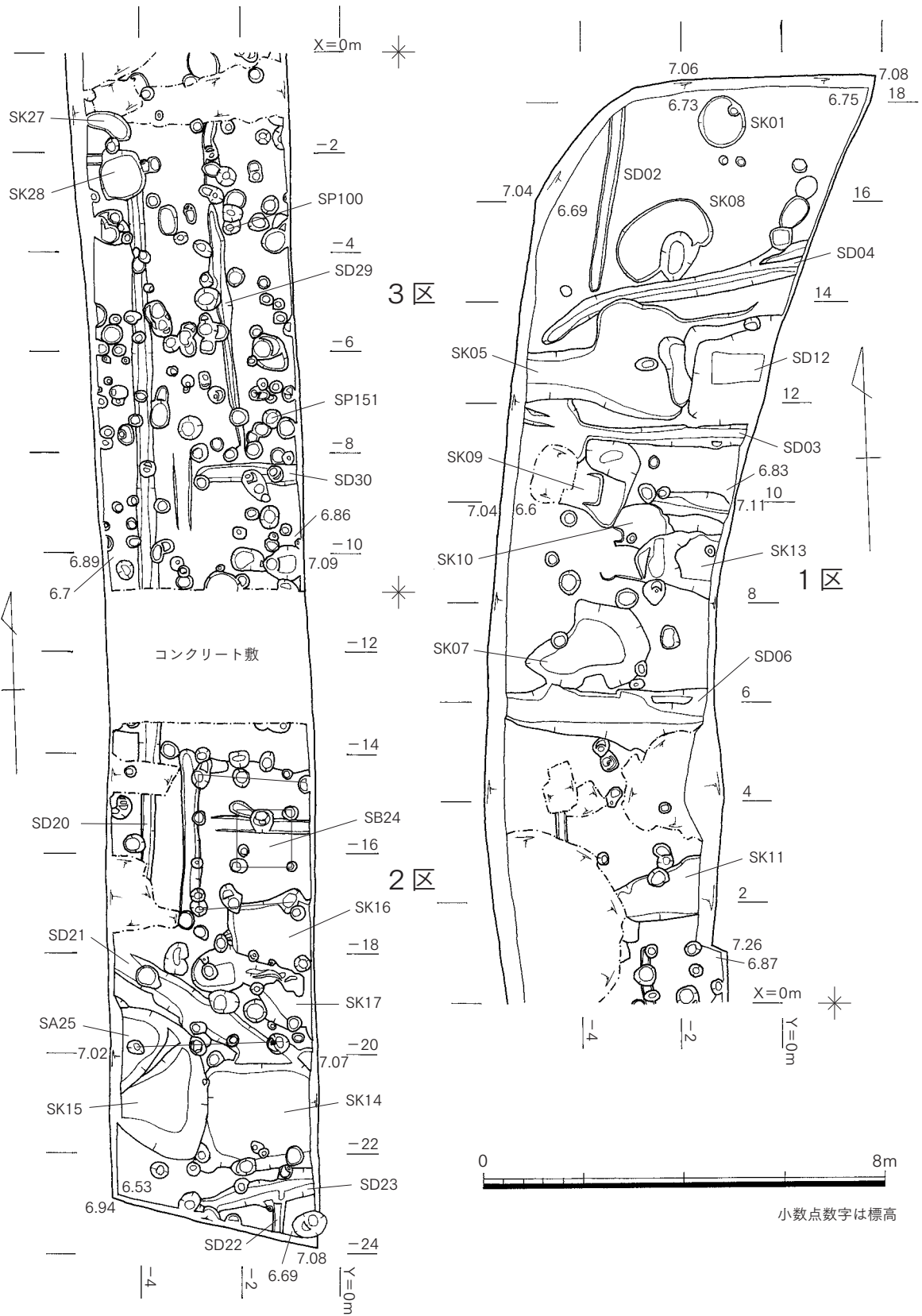


図4 調査区平面図 (S = 1 / 120)

第3章 調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は遺跡の南半部、香椎宮の北西に位置する。現地表面の標高は7.1~7.2mである。

今回は駐車場切り下げ部分240.91㎡を調査対象とし、車両などの出入口確保の関係上3分割し、敷地の北部を1区、南部を2区、1・2区の間中部を3区として調査を実施した。

遺構は現地表面下30~50cm、標高6.6~6.7mの黄褐色粘質土層上面で検出した。堆積土は表土、暗褐色砂質土（遺物包含層）である。検出遺構は平安時代後期~鎌倉時代前期の溝、土坑、ピットである。出土遺物量は土師器、中国産磁器、瓦、滑石製品、中国銅銭などコンテナ14箱分である。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

2 遺構と遺物

土坑

SK01（図5、図版1） 1区北端で検出。径1mの円形で、深さ5cm。

出土遺物（図7、図版4）

1は黒色土器の椀。残存高5.4cm。径6.3cmと9.4cmの二重の高台を持つ。にぶい黄橙・褐灰・黒褐色を呈す。胎土に2mm以下の褐色および白色粒を含む。内面にヘラによる研磨痕が若干残る。

SK05（図5、図版1）

1区北半、SD12の西側で検出。3.0×2.2mの不整形で、深さ5cm。

出土遺物（図7、図版4）

13は滑石製の用途不明品。2.7×3.8cm以上で、高さ1.7cm。中世にみられる円形の器2つを作りつけたものとみられる。

SK07（図5、図版1）

1区南半で検出。1.8×2.5mの不整楕円形で、深さ0.2m。

出土遺物（図7、図版4）

2は白磁椀。内面に縦方向のヘラ押圧線が入る。大宰府分類のXI-5類（10世紀後半~11世紀中頃）に当たる。3~11は土師器。3~6は皿。口径9cm前後、器高1.3~2.5cm、にぶい橙・浅黄橙・橙色を呈す。底部外面にはいずれも板状圧痕があり、3はヘラ切りを施している。7・8は高台付皿。8は口径9.9cm、器高2.1cm、高台径6.3cm、橙色を呈し、底部中央に焼成後の穿孔がある。9~11は杯。口径15cm弱、器高3cm強で、浅黄橙・にぶい橙色を呈し、10・11には底部外面に板状圧痕がある。型押し成型の可能性はある。12は平瓦。橙色を呈し、凸面に斜格子目タタキ痕、凹面に布目痕がある。格子目内に鉤状文がみられる。

SK08（図5、図版1）

1区北半、SD02の西側・SD04の北側で検出。2×1.1mの楕円形で、深さ8cm。

出土遺物（図7、図版4）

14は滑石製の用途不明品。2.1×3.1cmで高さ2.1cm。円形の器を作り出している。

SK09 (図5、図版1) 1区で検出。1.2×1.6mの方形で、深さ0.1m。

SK10 (図5、図版1) 1区、SK13の西側で検出。径1.2mの円形で、深さ0.1m。

SK11 (図6)

1区南半で検出。東西1.7m以上、南北幅0.95mで、深さ2～8cm。

出土遺物 (図7)

15は土師器の杯。口径11.2cm、器高3.8cm、底径6.2cm。橙色を呈し、底部外面に回転糸切り痕がある。

SK13 (図5、図版1) 1区で検出。1.6×1.2m以上の楕円形で、深さ0.2m。

SK14 (図6、図版2)

2区南半で検出。2.1×2.0m以上の方形で、深さ0.2m。SK15に切られる。

出土遺物 (図8、図版4)

16は土師器の杯。口径11.7cm、器高2.8cm、底径7.8cm、淡橙色を呈し、底部外面は摩滅が著しく調整不明。17は瓦質土器の播鉢。18は瓦玉。2.6×2.9cm、厚さ1.7cm。片面に布目痕がある。

SK15 (図6、図版2)

2区南半、SK14の西側で検出。2.3×2.0m以上の方形で、深さ0.3～0.4m。

出土遺物 (図8、図版4)

19は用途不明石製品。7.0×7.9cm以上の長方形で、片面の長辺沿いに溝を彫り込み、使用に伴う擦痕がみられる。もう片面には敲打痕、側面にはノミによる削り痕がみられる。20は土師器の杯。口径15.6cm、器高3.4cm、淡橙色を呈し、底部外面に回転糸切り痕がある。

SK16 (図6、図版3)

2区中央、東壁際で検出。2.5×1.5m以上の方形で、深さ0.2m。

出土遺物 (図8)

21・22は白磁。21は皿で、大宰府分類皿Ⅲ類(12世紀中頃)に当たる。22は椀で、大宰府分類VⅠ類(11世紀後半～12世紀前半)に当たる。いずれも底部内面に蛇の目形の釉剥ぎ取り痕と重ね焼き痕がある。23・24は土師器の杯。口径16.5cm前後、器高3.2cmで、橙色を呈し、底部外面は回転糸切り痕・板状圧痕がある。25は龍泉窯系青磁椀。

SK17 (図6、図版3)

2区中央、東壁際で検出。SK16の南側に接する。

出土遺物 (図8) 26は龍泉窯系青磁椀。

SK28 (図6、図版3) 3区で検出。0.9mの方形で、深さ0.3m。

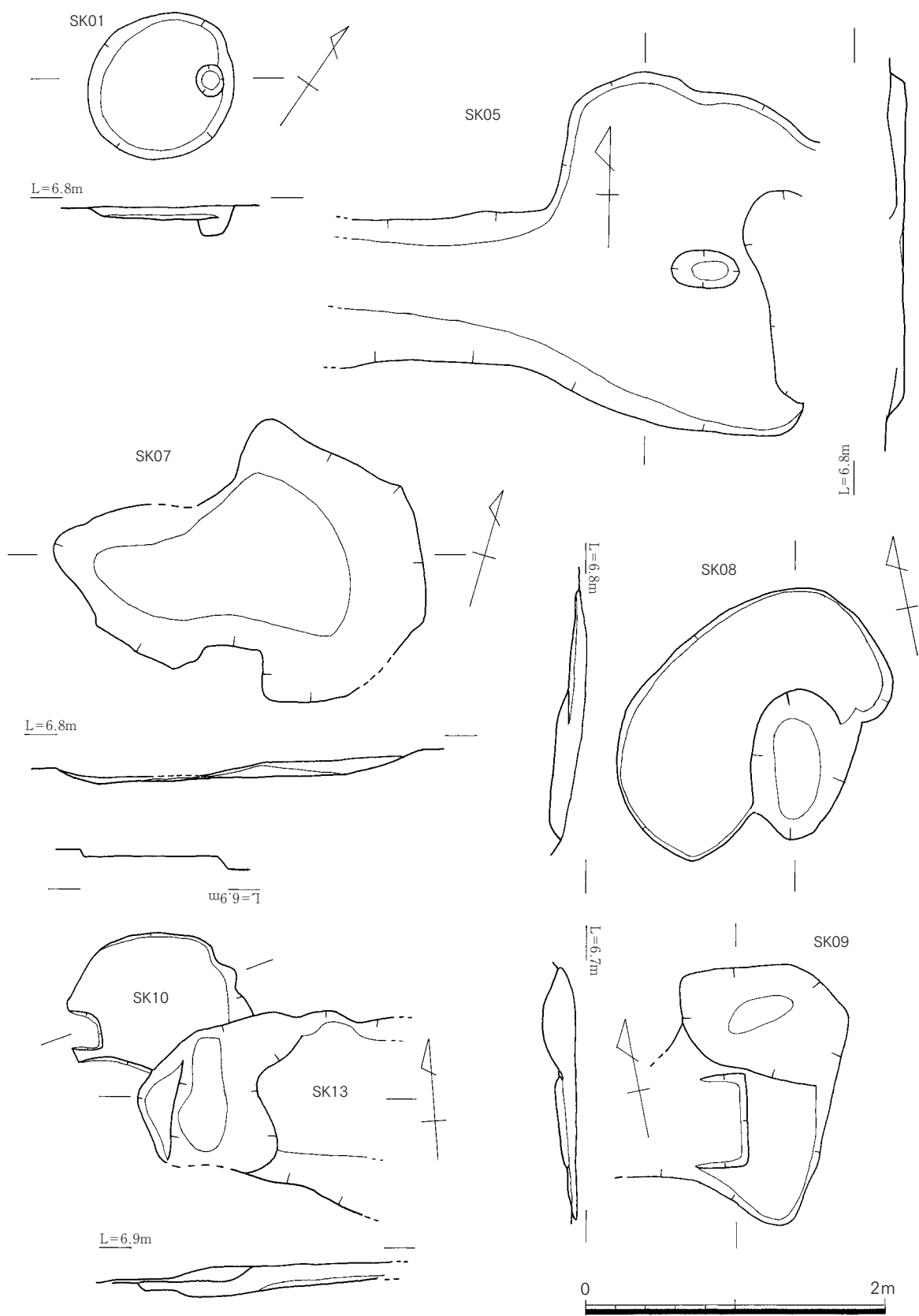


图5 SK01·05·07·08·09·10·13实测图 (S = 1 / 40)

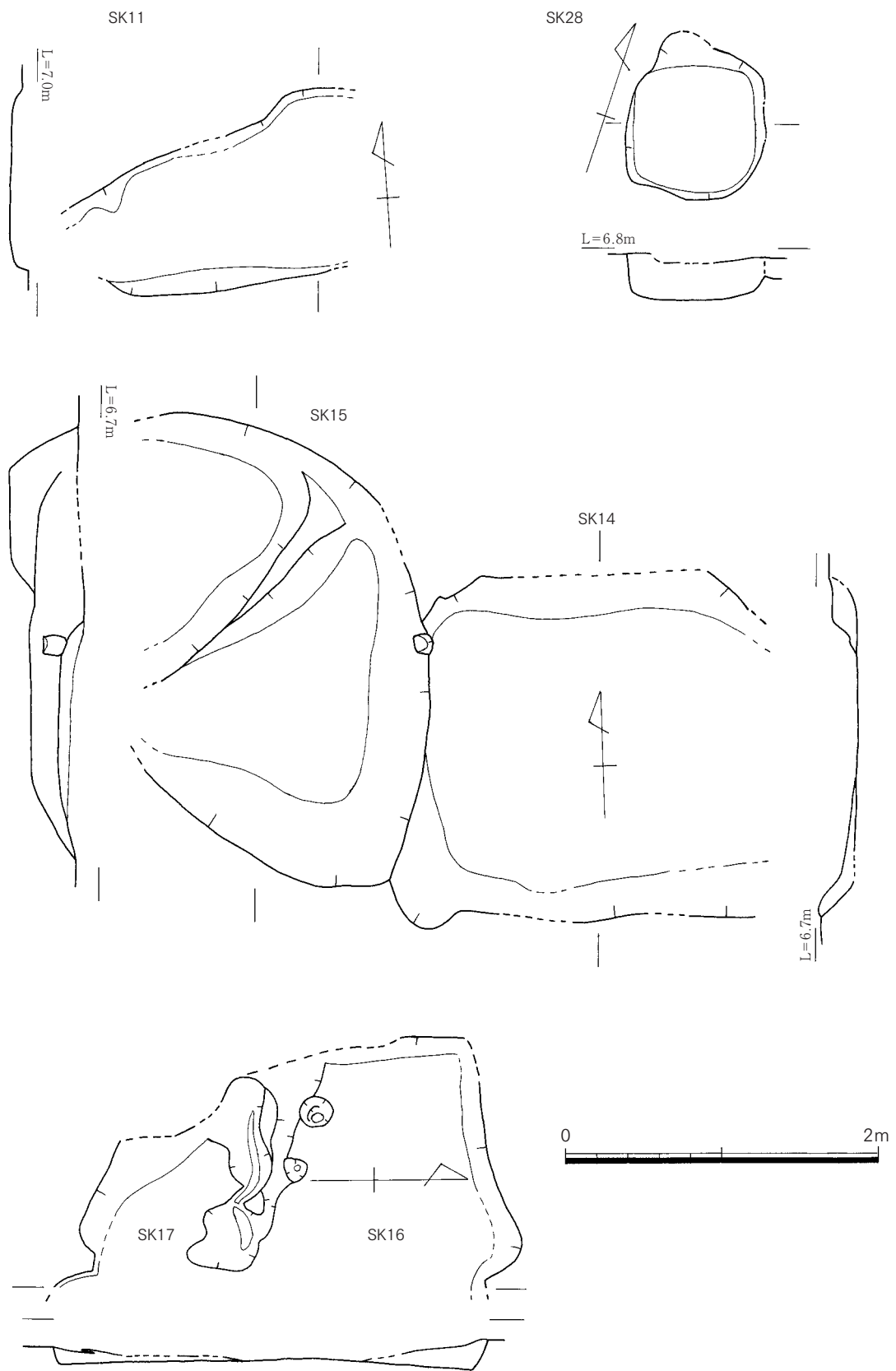


図6 SK11・14・15・16・17・28実測図 (S = 1 / 40)

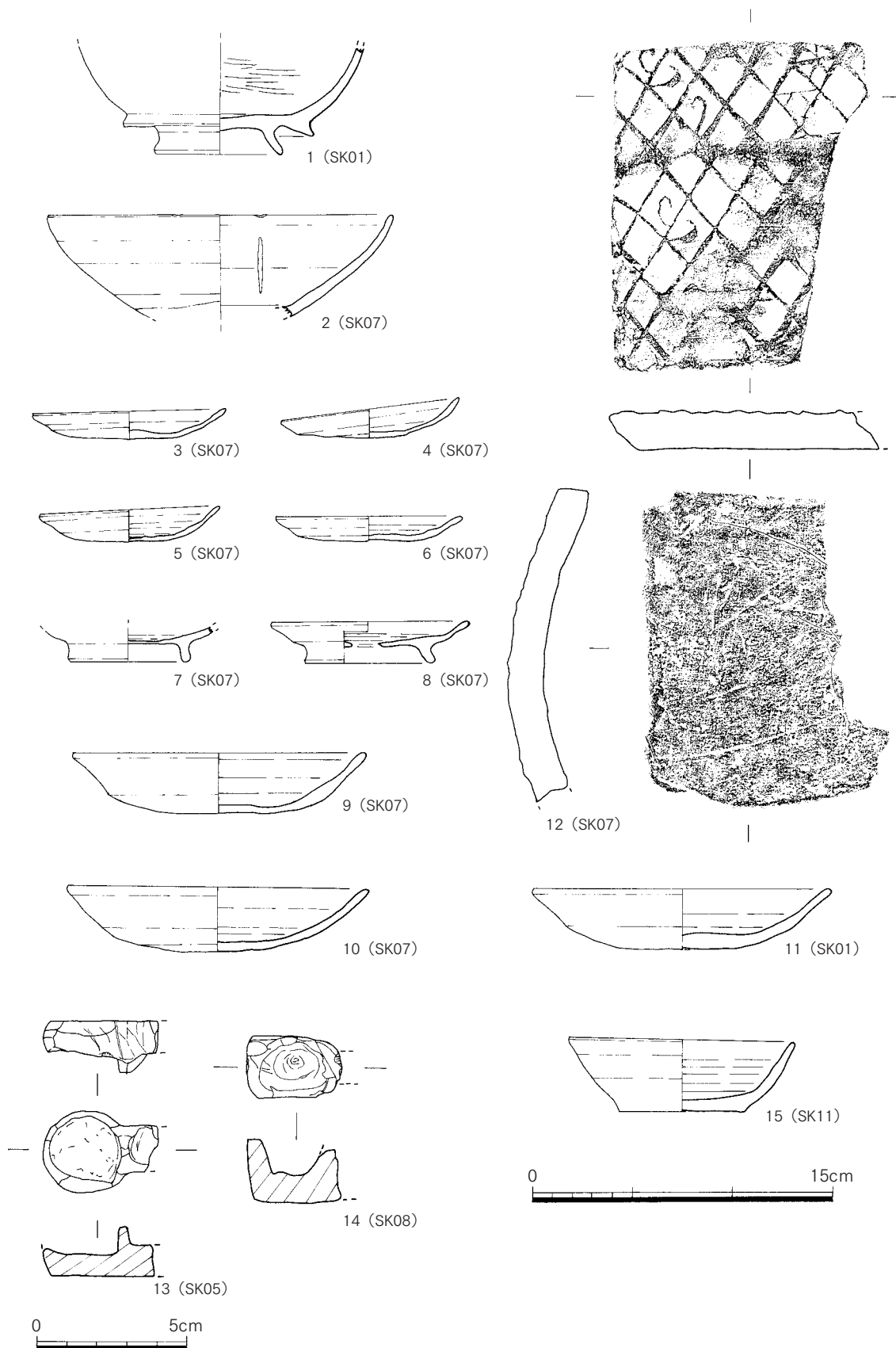


图7 S K01·05·07·08·11出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 2)

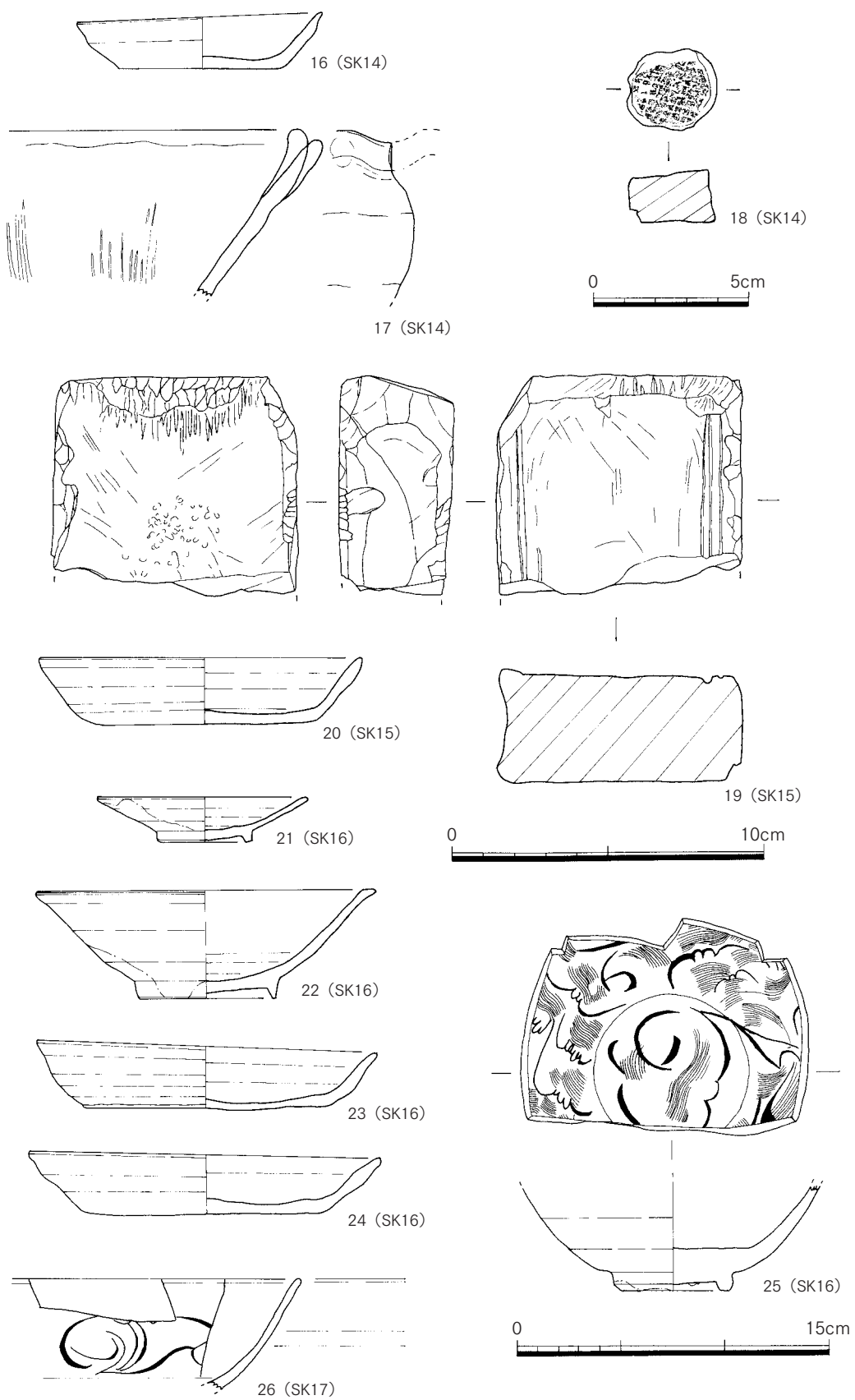


图8 SK14·15·16·17出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)

溝

SD02 (図4、図版2)

1区北西隅で検出。長さ3.75mの南北方向で、幅28cm、深さ4cm。覆土が灰褐色の締まりのない土で、2区のSD20、3区のSD29と傾向が同じである。これらの溝はピット群を切っており、最も新しいものとみられる。

SD03 (図4)

1区北半、SD12の南側で検出。長さ4.5m以上の東西方向で、幅0.3~0.4m、深さは調査区東壁際で20cm、同西壁際で8cm。

SD04 (図4)

1区北半、SD12の北側で検出。長さ5m以上の東西方向で、幅0.4m、深さ0.1m。

SD06 (図9、図版2)

1区南半、SK07の南側で検出。長さ4m以上の東西方向で、幅0.9~1.2m、深さ0.2m。

出土遺物(図9、図版5)

27~30は土師器。27・28は皿。いずれも浅黄橙色を呈し、28は高台付で底部に2.1×1.5cmの焼成後の穿孔がある。29は丸底杯で、にぶい黄橙色を呈し、底部外面に板状圧痕がある。30は高台付椀。淡橙色を呈す。31は土製錘。長さ3.2cm、最大幅0.9cm、孔径0.3cm。黒色を呈す。32は滑石製の用途不明品。円形容器の二連型をなす。33は銅銭の開元通宝(唐 武徳四(621)年初鑄)。34は丸瓦。凸面に斜格子目タタキ痕、凹面に布目痕がある。35は軒平瓦。橙色を呈す。

SD12 (図10、図版2)

1区北半で検出。長さ1.7m以上の東西方向で、幅2.1m、深さ1m。断面は逆台形である。出土遺物に朝鮮陶器が含まれることから、中世後半、15~16世紀とみられる。

出土遺物(図10、図版5)

36は土師器の杯。橙色を呈す。37は瓦器椀。38は朝鮮雑釉陶器の皿。高台の接地部分以外全面に白~浅黄橙色の施釉があり、内外面底部に重ね焼き痕の目跡がある。

SD21 (図10、図版3)

2区で検出。長さ3.9m以上の北西~南東方向で、幅0.5~0.6m、深さ0.1m余。SK15に切られる。

SD23 (図10、図版3)

2区南端で検出。長さ2.5m以上の東西方向で、幅0.5m、深さ0.1m余。SK14に切られる。

SD30 (図4、図版3)

3区南半で検出。長さ2m以上の東西方向で、幅0.4m、深さ0.1m弱。調査区外東側に延びる。

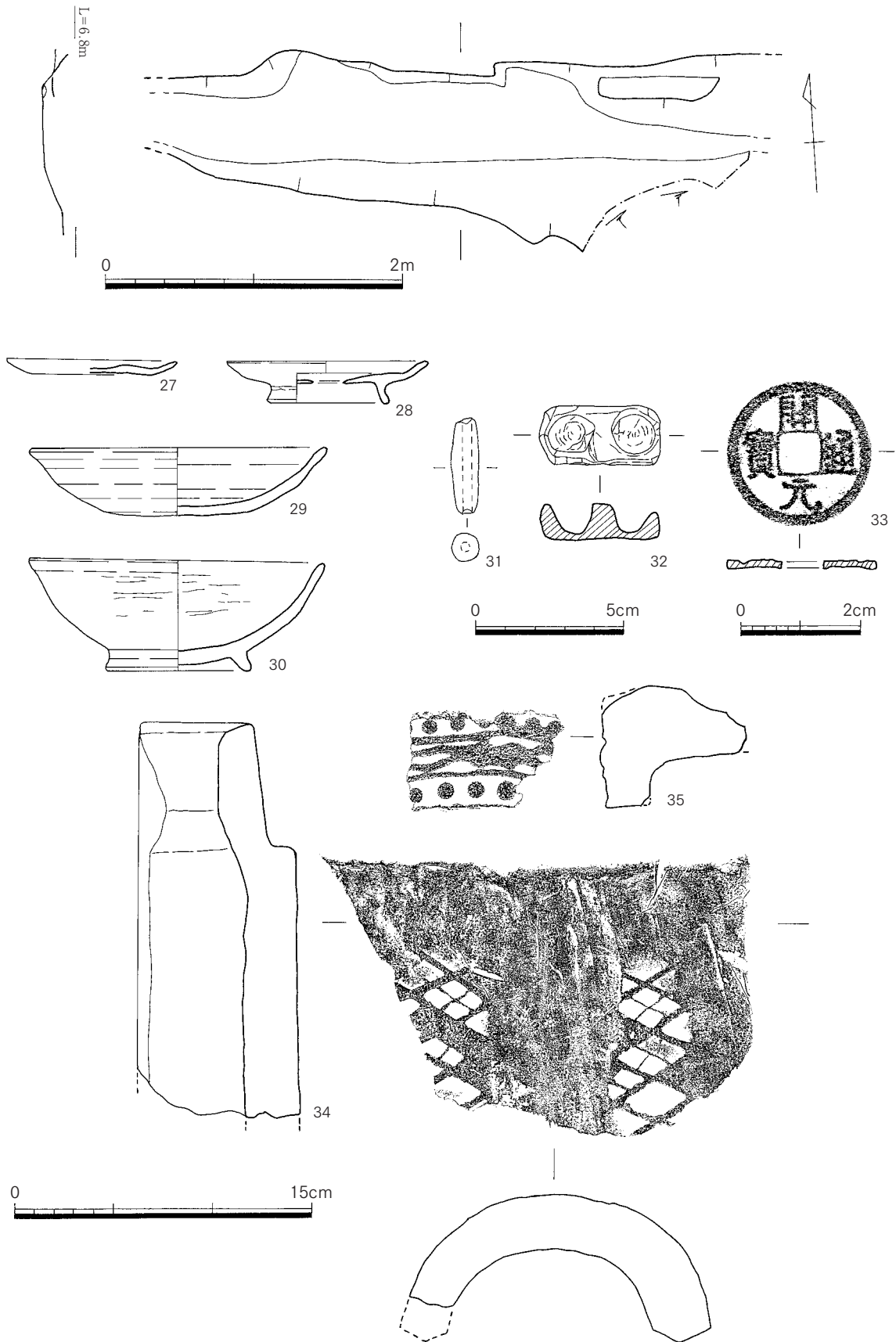


図9 S D06および出土遺物実測図 (S = 1/40、1/3、1/2、1/1)

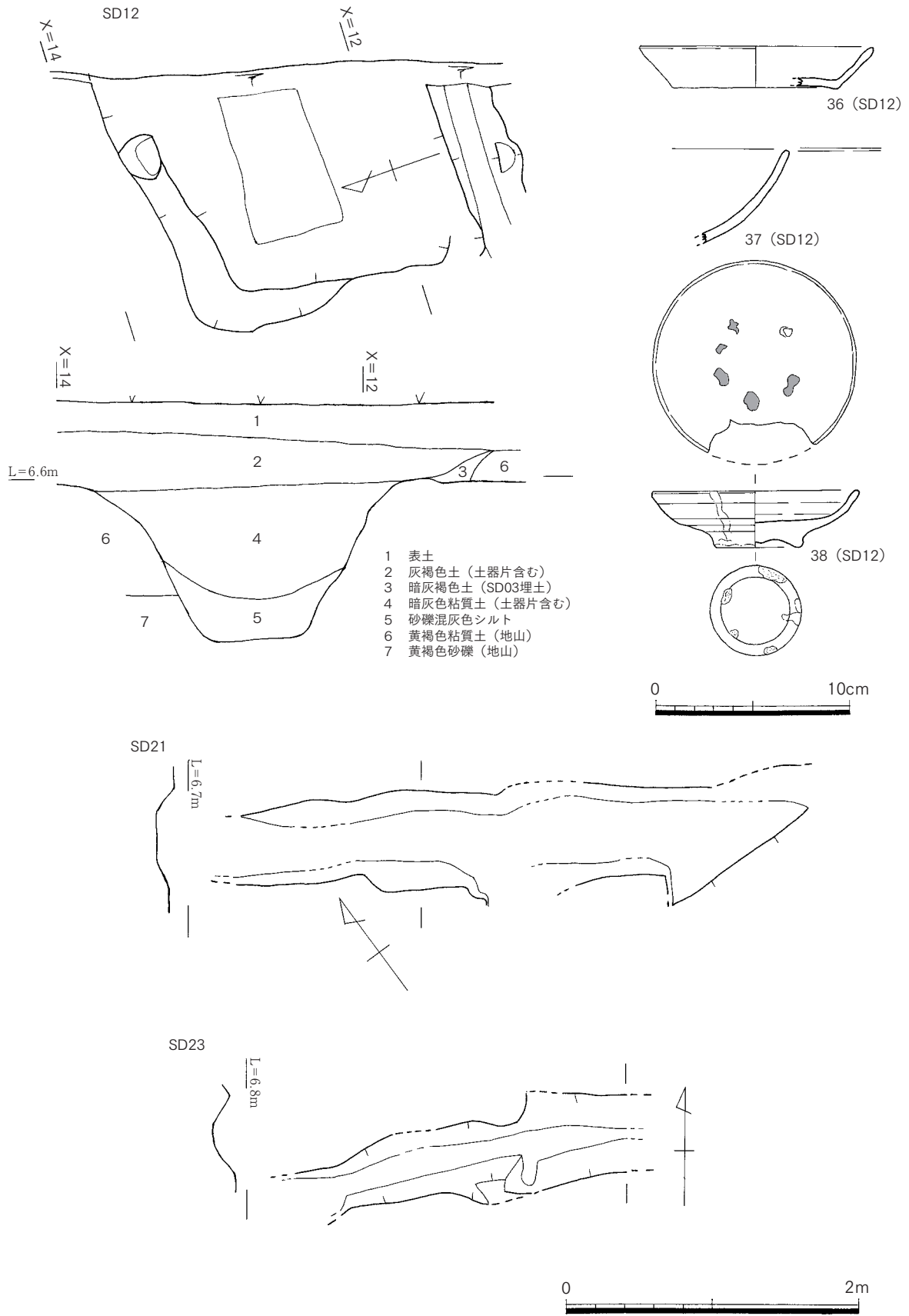


図10 S D12・21・23および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3)

掘立柱建物

SB24 (図11、図版2)

2区北端、東壁際で検出。1間0.7~1.3m、ピットの径0.2~0.5m、深さ0.45m。1間・1.1m四方の柱列の外側に3間・2.6m四方の柱列が並ぶ。東側は調査区外にもう1間分延び、方形を志向しているものと推定する。柱列は西側が溝に、南側がS K16に切られている。1間四方の柱で囲まれた内側の北寄りに石材を入れたピット (S P35) がある。建物の中心軸の傾きはほぼ磁北である。小堂か。

柵

SA25 (図11、図版3)

2区南半で検出。東西方向で1間1.2~1.5mで2間、長さ3m以上。ピットの径0.25~0.45m、最深0.7m。他に組み合うピットを見出し難かったことから柵と認定した。S P55では一辺0.1mの角材、S P67ではピット底に沈下防止の石材が残存していた。

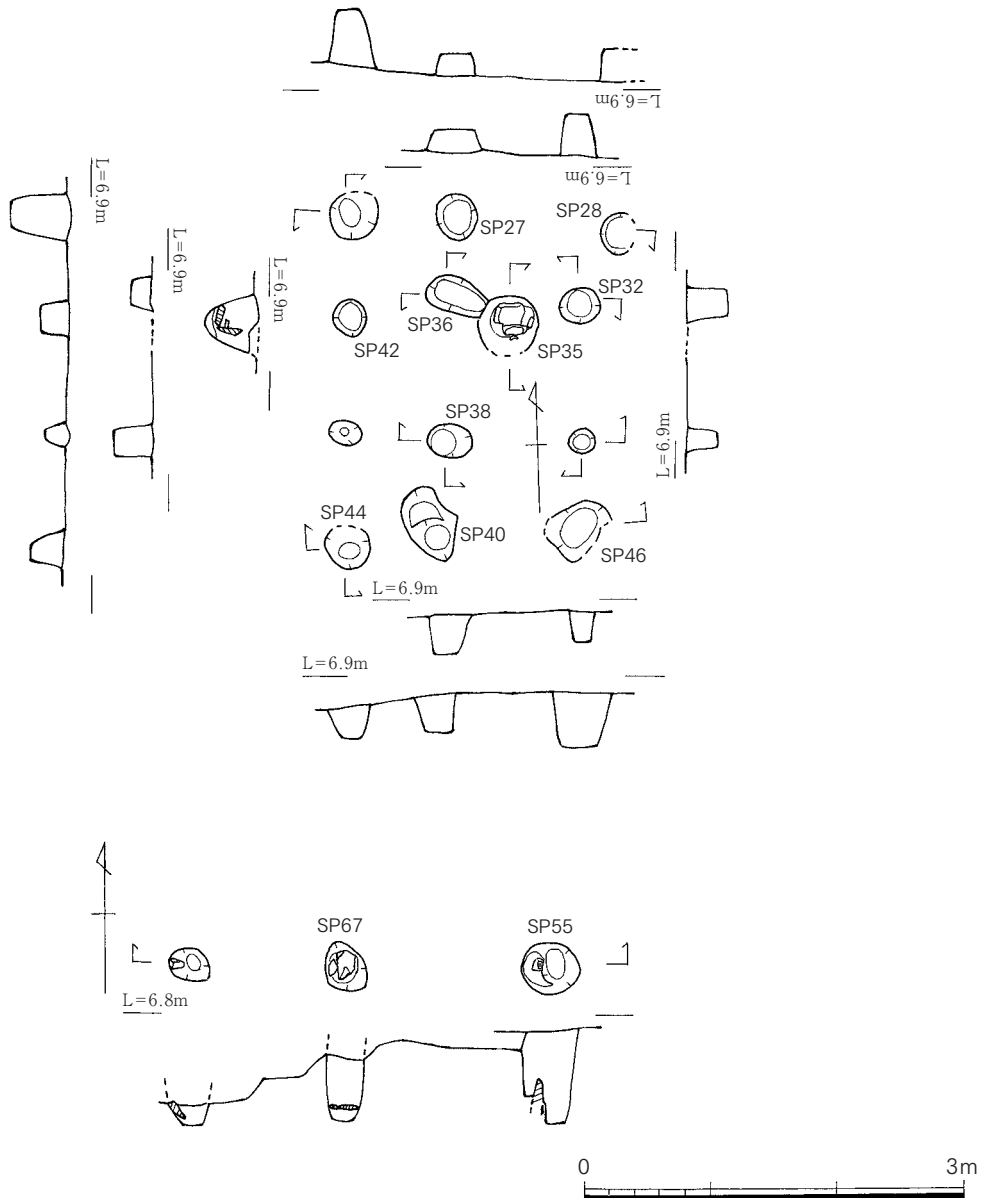


図11 SB24、SA25実測図 (S = 1 / 60)

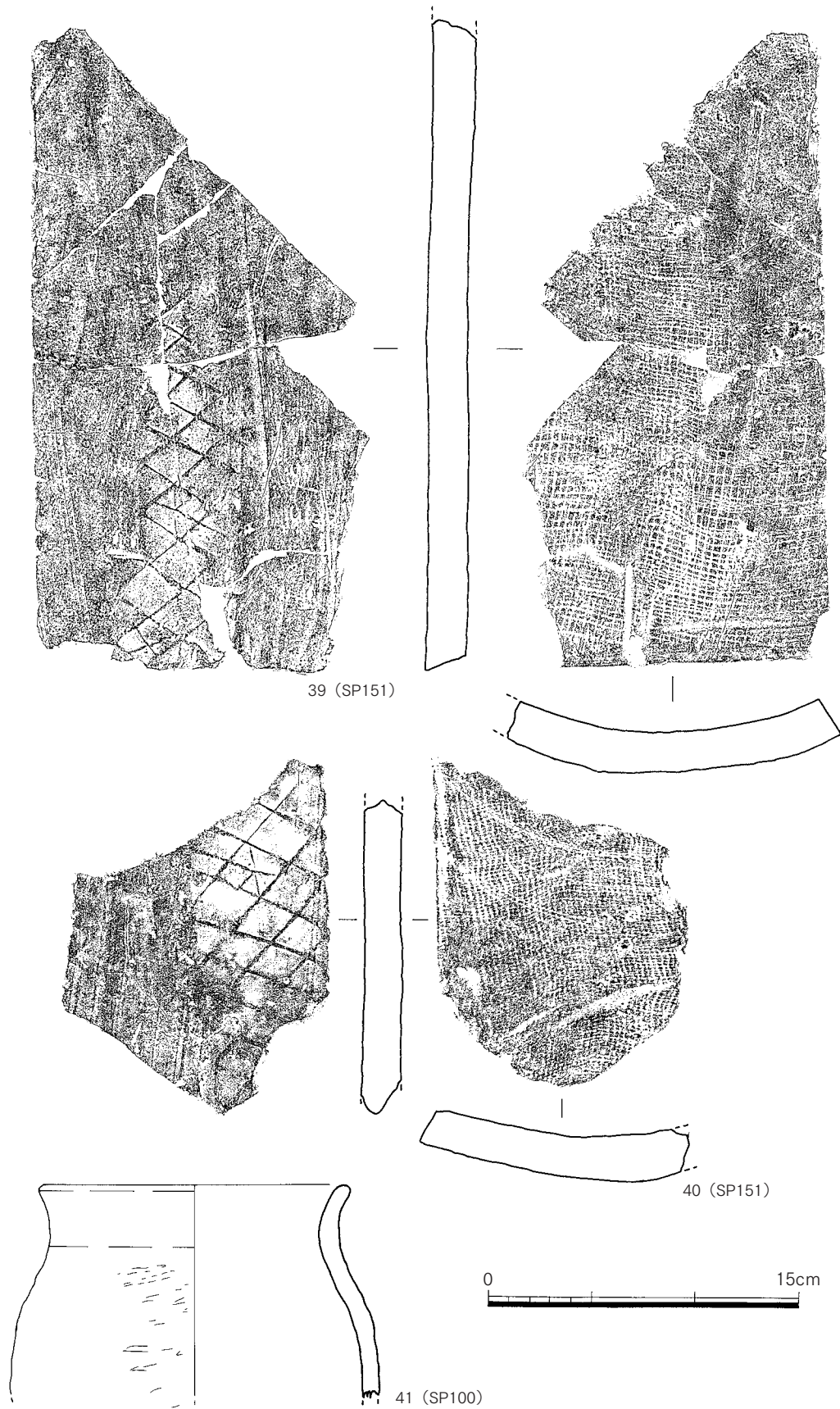


図12 ピット出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

ピット出土遺物（図12、図版5）

39・40は平瓦。凸面に斜格子目タタキ痕、凹面に布目痕がある。S P 151出土。41は土師器の甕。外面は橙色、内面は灰黄褐色を呈し、外面にタタキかともみられる痕跡がかすかに残る。古代の製塩土器か。S P 100出土。

3 まとめ

最後に今回の調査成果について、簡略ながらまとめておきたい。今回の調査では主に平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構を検出した。

出土遺物は土師器皿を主体とし、それに少量の中国産磁器片が混じる。その中でも白磁に対し青磁は比較的少ない。土師器皿の底部調整は、板状圧痕が残存し、ヘラ切りと見られるものが目立つ。これに回転糸切りが続く。瓦片も鴻臚館跡でよく見られる斜格子目タタキ調整のものが含まれる。

以上のことから検出遺構の時期幅は平安時代後期～鎌倉時代前期とする中で、より古相の11～12世紀前半に偏在するものと見られる。この時期の遺構・遺物として注目されるのは、2区のS B 24、1区S K 01出土の黒色土器碗である。

S B 24は東側が一部調査区外になるが、1間四方の外側に1間分、3間四方の縁または庇を持つ正方形を志向した建物と推測し、小堂の可能性を考えている。その南側に東西方向の柵S A 25がある。建物としてまとめきれなかったが、調査区半ばの3区より南側には100基を越えるピットがあり、建物域の中核部とみられる。

S K 01出土の黒色土器碗は、二重の高台を持つ特殊なもので、托付土器碗と呼ばれる【1】。密教法具の六器に由来があり、高台付皿・盤の上に載せた碗を象っている。10世紀後半以降の所産で、九州圏内では、英彦山・大宰府・筑後国府・筑前国分寺・宇佐八幡宮弥勒寺などで出土している。福岡市内では、箱崎遺跡26次S K 043、有田遺跡群8次包含層、大原D遺跡4次S D 004に加え、特に鴻臚館跡ではS D 15052（鴻臚南館東限の南北溝）③層出土の3点を含む計5点の出土がある。

これらの遺構・遺物から、平安時代後期のより古い時期に香椎宮の北西域には仏事に関わる施設が存在していた可能性が浮かび上がるとともに、鴻臚館との関連を視野に入れておく必要が出てくる。平安時代以降神仏習合が浸透していく具体的な姿として、今後注目に値する。

時期が下るものとして注目されるのは、1区のS D 12である。東西方向で西端部を検出している。出土遺物に朝鮮陶器が含まれ、幅・深さから中世後半期に属する屋敷などの区画溝の可能性が想定される。過去の調査における屋敷地の存続下限と連動するものとみられる。

事前の確認調査では、東側の住宅部分にトレンチを入れており、所見では自然の落ちが全面に広がるものの西側の道路面までは伸びていないことから、池状の窪地と想定し、出土遺物は自然の流れ込みとしている。調査範囲が限定されるため、S D 12との関係が定かではないが、確認された深さ・断面から自然の落ちではなく、S D 12の一部を捉えた可能性が高い。

今後住宅部分が調査の対象になった場合、落ちとされるものが人為的溝か自然地形か、確認する必要がある、人力による掘り下げには相応の時間を必要とすることから、注意が必要である。

部分的な調査という制約もあり、明らかにしうることは少ないが、今後の周辺域における調査の進展により、さらに興味深い事実が出てくるであろうし、それを期待させる成果を今回得られたものと考ええる。

【1】濱邊空2022「密教法具―托付土器碗の検討―」第24回七隈史学会ポスターセッション・レジュメ
西田尚史（福岡市埋蔵文化財課）の教示による。



1区全景（南から）



S K01（北から）



S K05（東から）



S K07（西から）



S K08（東から）



S K09（西から）



S K10（東から）



S K13（東から）

図版2



S D02 (北から)



S D06 (東から)



S D12 (西から)



2区全景 (北から)



S B24 (東から)



S P35根石 (東から)



S K14 (西から)



S K15 (東から)



S K16・17 (西から)



S D21 (南東から)



S D23 (南西から)



S A25 (南西から)



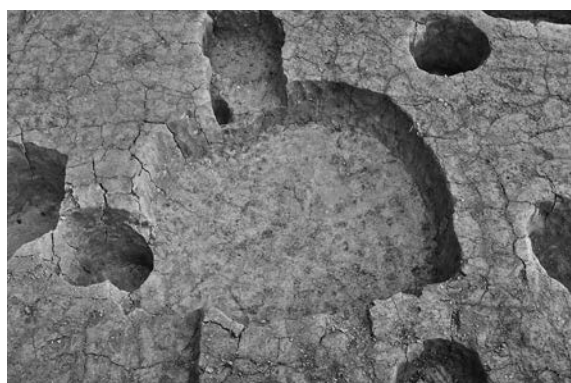
S P55 (東から)



3区全景 (南から)



S D30 (東から)



S K28 (西から)

図版4



1 (S K01)



3 (S K07)



9 (S K07)



8 (S K07)



12 (S K07)



18 (S K14)



13 (S K05)



14 (S K08)



19 (S K15)

出土遺物 1

図版5



25 (S D06)



28 (S D06)



31 (S D06)



32 (S D06)



33 (S D06)



38 (S D12)



34 (S D06)



41 (S P100)



39 (S P151)

出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	かしいえーいせき							
書名	香椎A遺跡6							
副書名	第9次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1499集							
編著者名	木下博文							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
かしいえーいせき 香椎A遺跡 第9次	ふくおかしひがしくかしい 福岡市東区香椎 4丁目1244番1、 1244番2	40131	0069	33度 39分 15.92秒	130度 27分 4.46秒	20220905 ～ 20221027	177	記録 保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
香椎A遺跡	集落跡	中世	土坑、溝、掘立 柱建物、柱穴	土師器、中国産磁 器、瓦、滑石製品、 銅銭				
要約	香椎A遺跡は福岡市の北東部、香椎丘陵上に立地する。南東隣に香椎宮が鎮座する。今回の調査地点は遺跡の南半に位置し、現地表面の標高は7.1～7.2mである。現地表面下30～50cm、標高6.6～6.7mの黄褐色粘質土層上面で、平安時代後期～鎌倉時代前期の土坑・溝・掘立柱建物・柱穴を検出した。							

香椎A遺跡6

— 第9次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1499集

2024（令和6）年3月22日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 魚住印刷
〒812-0033 福岡市博多区大博町8-20

